

アジアダイナミズム研修視察（済州平和フォーラム2017）学生報告

*要約抜粋

経営情報学部2年 佐々木 依子

一番感じたことは、世界は広いということです。自分にはまだ知らない世界が存在しているのです。壇上には著名な方々がそれぞれの国の言葉を使い意見交換していて、初めて見る光景に衝撃を受けました。語学に関心のある私にとって特に感銘を受けた点は、言葉が異なる中で同時通訳によりリアルタイムで意見交換が行われていることでした。さらに日本語の同時通訳を聴いている私たちがその場の意見を理解できるという点でした。今回69か国4000人が世界各国から集い、世界から見た日本、そして日本から見た世界を実際に肌で感じることが出来た5日間でした。普段大学生活では絶対に体験できない貴重な充実した研修となりました。

経営情報学部2年 助川 拓也

初めての海外だったので、不安や楽しみでいっぱいであった。海外留学入門として趙教授に誘われて実際に行ってみると、成田空港からすでにわくわくしていて、学生同士はもちろんだが、日本の経営者や多摩大教授とも色々な話ができて、帰国するまでずっと楽しかった。交流した済州漢拏大学の学生は日本語が上手で、自分も英語や韓国語をさらに話せるようになり、親しい交流をしたと思った。この研修のテーマは、日韓中の交流を通じて、アジアの政治・社会問題を解決する事である。

今回の研修のように、あらゆるところで各国の人と交流を以て、アジアの平和問題を解決していける礎としたいと感じた。

経営情報学部2年 廣野 樹梨

日韓学生交流会では『日韓の大学生・若者事情』をテーマに『アニメから見た日本の若者』という切口で発表した。アニメが好きという済州漢拏大学の学生さんから積極的に話しかけられて、すぐに仲良くなった。フォーラム会場の近くには海と観光スポットがあり、そこへの行き方などを教えてくれた。とてもフレンドリーなので韓国の学生に良い印象を持った。日韓で問題はあがるが、互いに歩み寄れば解決する問題も多いのではないと思う。アジアの問題についてさらに知り、考えていきたいと思える機会となった。交流の機会を作り、多くの日韓の若者がアジアについて考える世の中になる未来を作っていけたらいいと思う。

経営情報学部2年 松澤 葵

フォーラムでは著名な方々が発表をし、どれも興味深い内容でした。ノーベル平和賞受賞者のアル・ゴア氏による「気候変化の機会と挑戦、より良い成長は可能なのか」という内容が印象深く、表現が上手で、多くの人にわかりやすい内容であり、環境問題というとても大きなテーマの中で自分の考えを多くの人に共感させるようなセッションでした。地球温暖化によって海面上昇、ウイルスの拡散、台風の巨大化など、こういった問題を解決するために化石燃料ではなく風力や太陽光を稼働しており、結果もでていて、という事を力強く言っていました。このような結果からこれから化石燃料に代わって風力や太陽光といったエネルギーに関する職が増えていくだろう、と先を見据えた講演でした。最初から最後まで引き付けて離さない魅力を持ち自信あふれる発言から副大統領はここまでの人物でないといけぬのか、と尊敬しました。どのセッションも未来を考えた事を話していて、これから先自分はどういう企業に就職するのがいいのかとても考えさせられました。

経営情報学部2年 山下 泰雅

初めての海外であった。右も左もわからず、また難しいセッションがあるので最初はとても行きたくなかった。でも私は行くことに意味

があると思い、楽しんでいくことに決めた。難しいテーマのセッションが多かったが、聞いているうちに納得できる問題意識と解決案が沢山あることに気付いた。済州漢拏大学との盛大な国際交流協定調印式と交流会では、田村理事長と金総長が代表挨拶をし、そのあとは、現地の学生たちと色々楽しい話題を交えながら学校を案内してもらった。敷地も広く設備も充実していた。別れるのが悲しく、韓国の若者事情が知れてよかった。

済州島は面白いミュージアムが多く、二つのミュージアムに行き、観光も楽しかった。アジビの海鮮鍋や焼き肉も美味しかった。自由時間での買物タイムは韓国の大型店の特徴がうかがえた。行くこと、体験することに意味があり、またこのような機会があれば参加したい。

経営情報学部1年 村上 竜也

今回の研修で私の心持ちはどう変化したかということ、今までは放っておけば日韓は自然に親密な関係になっていくと思っていたが、まだ日本に対する反感を抱き続けてきた韓国人の方々、あるいは日本人で同じように韓国人に良い印象を抱いていない人々の感情を少しでも前向きな姿勢に変えていきたい、両方良い国だから互いに手を取り合っていくべきと伝える事が出来たら良いと思いました。

大学院経営情報学研究科1年 高村 直

新たな価値観を知り、世界のビジネスを学び、一步成長したいと思い、仕事を調整して参加した済州平和フォーラム。経営者の端くれでもある私が、興味を持ち、実体験と重ねて共感したセッションは、「アジア長寿企業の新価値創造と経営者哲学」である。地域社会に貢献することが、会社の意義だという言葉は今後私が目指していくべき考えである。韓国老舗食品会社バク社長の「社員を不幸せにする要因を除くことが会社の安定成長に繋がる」という言葉も、意識的に実践していきたい。多摩大訪問団のためのソ・ジョンハ済州フォーラム組織委員長講演を終えて多くの学生が意見を述べていたことに、「韓国のイメージが変わった」ということがある。本質はやはり実体験にこそあると思う。この世の中、知識は容易に手にすることができる。生き抜く上で、大切なことは知識ではなく知恵ではなくなるうか。知恵は、経験値から生まれるものであり、今回、多くの方とディスカッションができた。12年前まで学部生として多摩キャンパスに通っていた私は、遅ればせながら、若い皆さまと一緒に一つの経験を積むことができた。

多摩大学目黒高校1年 小村方 月花

田村校長先生と松井先生の引率のもと、貴重な体験をし、様々なことを学びました。アル・ゴア元アメリカ副大統領やメガワティ元インドネシア大統領等の講演を聴くことができました。過去に国のトップとして国を動かしていた方々の現代の問題に対する考えは、説得力があり具体的でした。特に印象的だったのが、「韓中日青少年交流を通じた相互理解の架け橋作り」というセッションです。日本人として韓国と中国との関係にはしっかりと向き合うべきだと思います。過去の戦争や事件により良好とはいえない関係ですが、お互い今後も協力せずにはいられない大切な国だと思います。その上で、国のトップ同士の会談だけでなく、青少年同士の交流が重要であるということに共感しました。また、問題の認識は国によって異なり、それは「間違い」ではなく、「違い」であるという言葉が印象に残っています。今回の体験から得たものは、これから先様々なことを考える上でも役だってくれると思います。これをきっかけに今ある多くの問題を自分から積極的に調べ、それに対して、自分なりの考えを持てるようになりたいです。



多摩大学主催セッション風景



日韓学生交流会の様子



日本経営者との懇親会

「デジタル時代のメディア実践」の現場から

興味と不安を抱きながら、創ることへの挑戦

経営情報学部 1年 小柳 京也

「明らかに年上の先輩ばかり、これからの授業をこなしていけるか不安だなー」

「産業社会特講・デジタル時代のメディア実践」などという高遠なイメージの教室に一歩足を踏み入れた時の第一印象だった。

なぜこの授業に興味を持ったのかと言えば、今まで私が抱いていた経営や経営といった概念とは少し違って、自分を取り巻く様々な環境が社会にどのように影響しているのかを学びながら社会に働きかけていくアクティブな授業だということを知ったからだった。

「ここでは君たちが主人公。リングに上がるのは君たちだ」と木村先生。自ら調べ、企画を立て、現場に立ち、見聞きしたことをまとめ、不特定多数の人に見てもらった作品を作り上げる。その目標にむけて、それぞれが、自分で進んでいくという授業スタイルだ。なんだか面白そう！と思った反面、難しさにも気づく。

しかし、先輩たちはみんな明るく気さくで面白い雰囲気の人たちばかり。先生は、私がこれまでの見聞や経験で得たものとは全く違う知識を持っていて、話を聴いていると毎回発見や驚きがあって世界が広がっていく気がする。ただし、先生から与えられたものを作業のようにこなしていくのではなく、自分で企画し、実行し結果を発表するというのはなかなか大変だ。でも、教室での学びを重ねるうちにそのサイクルがつかめてきたような気がして、力が湧いてきた。

企画を考えよう！と言われて私は、入学して引っ越してきた多摩市で感じた興味や疑問について調べてみようと考えた。

山を切り開いて街を作るとなると時間、人、お金が大量に必要なんだろう…。多摩ニュータウンを目にして思った。ただ大きなマンションだけ作ればいいわけではない。街路樹や道路をどのようなところにどれだけ造るのか、それをどうやって決めていったのか。興味がどんどん広がっていく。人間が人工的に作り出したものと動植物の生態系の関係はどうだったんだろう。広大な土地をどのようにして切り開いていったのか、技術的にどんな苦労があったのか、作業に携わった人の声も聞いてみたい。多摩ニュータウンが生まれる前のススキの野原が広がっていたころの多摩市と現在の違いなども掘り下げていけば面白いことが山のように出てきそう。当時の人々がどのような思いを込めて道路を、橋を、建物を、ライプラインを造り、整備してニュータウンを作り上げたのか、その想いが少しでも伝わるようなものを作りたいと思いはじめた。

教室で発表したら、いいね、面白い！と先生。前に在籍した先輩で「多摩の森には橋がある」という企画を発想した人がいることも知った。企画に自信が持てて、気持ちが盛り上がってきた。

ビデオカメラによる撮影の実験も体験した。見た目は軽そうに見えても時間が長くなってくるとたまらなく重い！腕に、肩にズシリときて疲労がたまり、撮影パフォーマンスにも影響してくる。でも、撮る対象をアングルひとつで様変わりさせてしまうカメラはすごいと実感した。

まだ始まったばかりで、率直に言うと、これからやっていけるか不安もある。しかし、すべてが新しいことの連続なので、日々それらを取り込んで成長していけたらと思っている。そして、「無」から「有」を創り出し、人に新しい発見を伝えることができたらと思っている。

何かを創るおもしろさへの挑戦がはじまった。



顔はにっこり、腕には辛いカメラ実習



興味深々魅力がいっぱい、多摩ニュータウン

達成感と充実感めざして、キックオフ！

経営情報学部 3年 松村 佑太

「デジタル時代のメディア実践」？はい？？って感じで、正直、はじめは何もイメージが浮かばなかった。履修する授業に悩んでいる時に、友達は何人も履修するというので、とにかく教室に行ってみた。入ってみると、雰囲気はにぎやかで、授業は楽しそう。木村先生はボクシングのトレーナーのライセンスを持っているという。フットサルをやっている私からしたら、スポーツマンとして共感できることが多いかも、と思った。少人数で先生とコミュニケーションをとれることにも引かれた。話を聞いていると、カメラを使って動画作品の制作に取り組むという。ちょっと何か新しい事をはじめてみたいと思っていた時だった。

授業が始まって、企画を考えるのが一番大切で、企画がないとスタートラインにも立てないことがわかってきた。とにかく企画を考えなくてはならない！

そこで考えた。自分は多摩大学フットサルチームの一員なので、フットサルに打ち込む選手を描いてみたいという考えが浮かんだ。特に、元日本代表U-19の実績を持つ米田圭孝選手だ。普段は無口で、コミュニケーションを取るのも大変な選手だが、話してみると奥の深い選手だ。そんな米田選手は試合前にどんなルーティンの積み重ねがあるのか、試合にはどんな入り方をするのか。もちろん、撮影の許可が下りるかどうかはわからないが彼の性格上断られる事はないだろう。(笑) 万一断られたら、私が撮りたい理由、熱意、諦めない気持ちが試されると思う。強烈なシュートに正確なパス。普段とは人が変わったようなプレースタイル。彼の奥深いプレーに興味は尽きない。彼を追うことができれば、一流選手の試合が始まる前から試合後までの一連の姿を伝えることができる。

また、彼だけでなく、フットサルに魅せられた仲間の姿も伝えたい。スポーツの世界は厳しい。夢を持ってフットサルに打ち込んでも、必ずしもみんなが光の当たるコートに立てるとは限らない。そんな葛藤もあるなかの多摩大学のチームワークの良さ。そこにどんな秘訣があるのか。気になる事は多くある。

私自身は、幼稚園の頃からサッカーをはじめ今年で17年目。だが1度も全国優勝をしたことがない。大学に入りフットサルに競技変更をし、関東選抜に入った時に全国優勝はしたが、多摩大学のチームでは二年連続全国3位。目標の全国優勝まであと一歩で負けてしまっている。今年こそ全国優勝して充実した大学生活を送りたい。そして今までお世話になった家族、監督、コーチ、仲間感謝の気持ちを伝えたい。

私の動画制作が成功したら、多摩大学体育会フットサル部の名前をもっと多くの人に知ってもらい、一層よい環境でフットサルをすることができサポートになると思う。そしてフットサル部が先頭をきり、大学全体に輝きと活気が出るようになればいいと思う。

大学発の情報発信プラットフォーム、T-Studioを見学してモチベーションを高めようと思ってみてみた。ネットで見る映像はここで収録しているのか。カメラマンに音声さん。一人一人に重要な役割分担がされていて、皆で一つのものを作ることにとっても魅力を感じた。早く、カメラで撮影したいと思い始めた。どんな作品が完成するか分からないが、今後の人生にとっても良い1歩になると私自身思っている。

達成感と充実感めざして、試合開始のホイッスルが鳴った。



フットワークも軽快、名カメラマン！



めざすは大学日本一、この熱を作品に

後輩へのアドバイス ～視野を広げよう～

グローバルスタディーズ学部 (SGS) 4年 西山 雄大

私は日本で生まれ、マカオで育った「帰国子女」です。約20年間マカオで生活し、4年前に大学に進学するため帰国しました。私は高校卒業後現地で就職し半年間働いていました。そのため、2年遅れの入学となります。

このジャーナルでは、私が入学し困難に感じたことや帰国子女の目線から見た日本人の性格と改善すべき点について、そして、今後入学する学生もしくは在学中の後輩たちにSGSで学んで欲しいことについて書き記していきます。

私は他の人と比べて半年遅れの秋学期入学でした。そのため、当初友達を作るのは簡単なことではなく苦労しましたが、幸いなことにSGSでは1年生必修の英語の授業があり、1年間に渡って学生同士で共に英語を勉強し、交流する機会があったので少しずつではありますが友達が増えていきました。

私が友達作りに苦労した理由は日本人の集団意識です。お昼休みになるとSGSの学生のほとんどが食堂に集まります。そして、最初から決まっていたかのように、学生たちがグループを作り、席を埋めていきます。そのグループは毎回同じメンバーで集まり、「壁」があるかのように第三者を近づかせません。私は日本人の集団意識は結束力を生みととも良いと思います。しかし、時としてその集団意識は新鮮な意見を聞くことを遠ざけ、新しい価値観を吸収出来なくしてしまうことがあります。いつもとは違う人達との交流は、違った価値観を持った人々と、刺激し合えるということです。特に留学生と交流しようとする日本人の学生はとて少ないように感じます。SGSでは年に2回、提携を結んでいる海外の大学から留学生が訪れます。留学生と交流しようとする理由として「集団意識」のほかにも「英語が話せない」、「話すのが恥ずかしい」といった余計な心配をしていることが挙げられます。私はそれでも積極的に留学生と交流するべきだと思います。まず「英語が話せない」という理由ですが、話すという言語能力は実際に会話をしなければ上達しません。SGSには英語が流暢な留学生がいるので練習相手だと思い、話してみるのには損ではないと思います。そして「話すのが恥ずかしい」という理由について、自身の英語が下手だと思ひ、話すのが恥ずかしいという学生がいますが、留学生はそんなことは気にしていません。なぜなら、留学生は日本人が英語を母国語としていないことを知っているからです。留学生は日本人の学生が英語を話せないことを前提に会話をするので、英語が下手だとしても、相手が何を伝えたいのかを理解しようとしてくれます。そのため、学生には積極的に話すということに挑戦することをお勧めします。実際に海外の学生と

交流することで新しいことを知り、視野を広げることができます。それを存分に活かせるのは大学生の時だけです。そのための交換留学制度ですし、英語を試すことが出来、新しいことを学んで自分を更に高められる場が存在しているということがSGSの大きな魅力です。せっかく良い環境が整備されているのにも関わらず、それを使わないのはあまりにも勿体ないと思います。そのため、本校の学生にはこの貴重な時間を使い、開放的に様々な人と交流をしてほしいのです。

次に、私はSGSに入学して学び得たものについてです。それは「自身の強み」です。私はSGSで自身のコンプレックスを自身の個性であること、そしてそれが「自身の強み」であることに気づきました。私はマカオにいた頃、あるコンプレックスを抱えていました。それは「自身のアイデンティティ」です。私は自分が「なに人」なのかについて悩んでいました。それは国籍ではなく、自分自身の中身にあるものです。日本で教育を受けていない私は当時上手く日本語を話せていませんでした。そのため、両親は日本人ではありますが、両親や現地の日本人からはマカオで育った「マカオ人」と言われました。その一方で現地のマカオ人からすれば私は「日本人」です。このように私は双方から否定される形になり悩んでいました。そしてSGSに入学した際に「グローバル化」についての講義に参加した際、ある先生が言ったことが私を変えました。それは「グローバル社会においてアイデンティティとはどこではなく、どこどこの間にある」という、とある学者の論理でした。つまりグローバル社会において、人や物が様々な場所や国を流動的に移動するように、アイデンティティも自然に流動的に変わるということです。私はこの論理を自身も当てはめることで、自分はマカオと日本の間にいること、そしてそれは自身の個性であり、強みにも成り得ると気づきました。SGSでそういった他では学べない貴重なことを、新しく入学する学生や在学中の後輩に学んでほしいと思います。個々の強みでもいいですし、興味のあることでもいいです。様々なことを知り、視野を広げることで何かを得る。SGSはそれが実現できる大学だと思います。

まとめとして、私はこのジャーナルでお伝えしたいことは、学生に開放的になってもらい、様々な人や物事を受け入れ、視野を広げて新しい発見をしてほしいということです。SGSに入学したことで個々に得られる特別なものが必ずあります。コミュニケーションによって学び、新しい自分を発見出来る所、それが多摩大学グローバルスタディーズ学部だと私は考えています。



留学生や同級生と バーベキュー



留学生や友人と たこ焼きパーティー

2017年度学生会執行部始動 !!

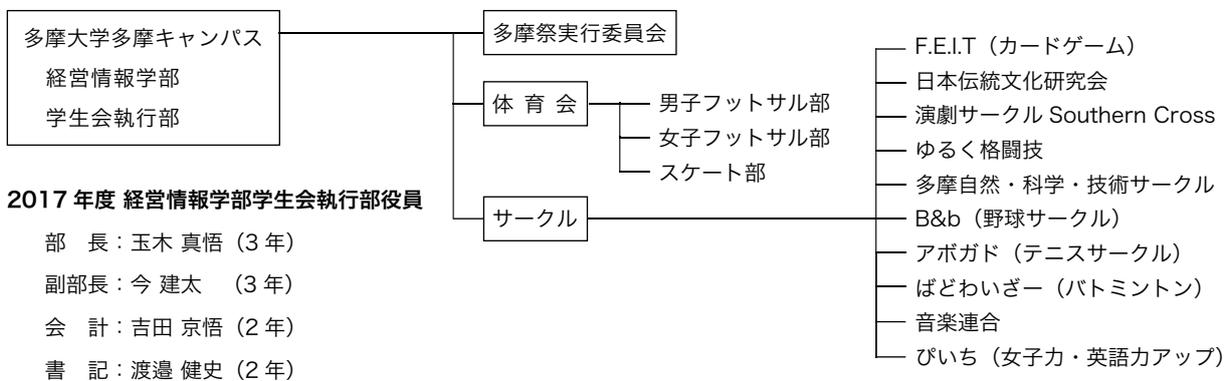
経営情報学部学生会執行部部長 3年 玉木 真悟

春の季節も過ぎて学生会執行部役員の仕事にも慣れてきました。

学生会執行部役員のメンバーが最初に取り掛かった事は、サークル規約の改定でした。今までは条件が厳しく、新しいサークルを作ることが難しい状態にありました。先輩方の卒業と共に消えてゆくサークルが増え、サークルの数が少なく、学内に活気がない様に感じました。規約の改定により作りやすい環境になり、新しいサークルが増える事によって学内に活気が戻ればと考えております。また、サークルは大学生活を彩る為にとても大きな役割を持っていると思います。新しく多摩大学の一員として入学した一年生の皆さんには、興味のあるサークルがない時は仲間とチャレンジをしてサークルを作り、楽しい時間を多摩大で過ごしてほしいと思います。

サークル規約の改定も終えて、現在学生会執行部は多摩祭（学園祭）実行委員会と共に、7月15日（土）に学内で開催するバーベキューパーティーに向けて動き始めています。学生会、多摩祭実行委員は新入生を迎えて初めての大きなイベントです。経験があまり無いメンバーもいますが、手探りながらも大きなイベントにしたいと思います。バーベキューパーティーが終わり次第、当日の様子などを、「学生ジャーナル」のこの場を借りて報告したいと思います。

今年度の学生会は多摩大学の学生達が輝ける様な機会を増やしていきます。これからもどうかよろしく願いいたします。



WELCOME ようこそ多摩大へ

2017年4月3日 多摩大学の留学生達を招き、多摩キャンパス T-Studio にて「留学生歓迎会」を開催しました。

歓迎会では、学食に依頼して料理を作っていただき、ピュッフェ形式の立食会を中心に、全サークルの代表が集まり自分達の活動成果を発表するサークル紹介や、教員の方を招いて、これから多摩大学で多くの事を学ぶ留学生に対してのメッセージなどをいただく企画を実施しました。

今回の立食会の乾杯の音頭は、今年度から着任された水盛涼一先生をお願いをしました。乾杯の音頭では水盛先生の提案で、司会の私と即興ですが中国式の乾杯の漫才をする事になりました。中国式の乾杯では、目上の人に対しては相手より自分の杯を少し下げて重ねるので、「教員である水盛先生」と「3年間多摩大学にいる先輩の学生」で位置を譲り合い、最終的にカーペットまで杯が届いてしまうというものでした。唐突に始まった漫才と水盛先生の明るいキャラクターで大いに会場が沸き、立食会は明るい雰囲気スタートを切ることが出来ました。

立食会では先生方を中心に学生達が囲み、世間話から留学生の母国のローカルな話題、なぜ多摩大に留学を決めたのかも話題に上がっていたことが印象に残っています。サークルの各代表の学生達も自分のサークルをアピールし、その後興味がありそうな留学生と共に食事を取っていました。

私たち多摩大学の学生も留学生と触れ合う機会は、この様な場が無ければ少ないように感じます。これからも交流する機会を増やしつつ、多摩大生、留学生共に大きな学びの機会になる場を作って行こうと思っています。



留学生歓迎会での留学生と先生方、サークル代表達との集合写真